

広島市植物公園におけるミナミメダカの記録

佐藤祐輔・山本晃弘・向井昭彦

広島市植物公園（以下、植物公園）でミナミメダカを確認したので報告する。本種は植物公園での記録が無く、初記録と思われる。

はじめに

ミナミメダカ *Oryzias latipes* は、日本の在来淡水魚である。以前は日本に生息する『メダカ』は1種とされていたが、近年の研究により、主に日本海側に生息するキタノメダカと太平洋側に生息するミナミメダカの2種に分類された (Asai et al. 2011)。

ミナミメダカの生息環境は水田や用水路、ため池などであり、かつては多くの地域で見ることができた (竹花・北川 2010)。しかし、生息環境の変化、農薬の使用や外来種の侵入によって絶滅が危惧されるようになり (竹花・北川 2010)、現在では環境省レッドリストの絶滅危惧II類 (環境省 2015)、広島県レッドデータブックでは準絶滅危惧に選定されている (レッドデータブックひろしま改訂検討委員会 2012)。

記録

2020年6月7日に植物公園の日本庭園からかくれ里の「うらら池」(以下、うらら池) にかけて流れる水路でミナミメダカを5頭確認した (図1)。また、同年6月14日、ミナミメダカと思しき稚魚もおおよそ30頭確認した。

考察

今回植物公園で見つかったミナミメダカは成魚だけでなく稚魚も確認できたため、植物公園内で繁殖している可能性も考えられる。しかし、本種が植物公園在来のものであるかは明らかではない。

仮に、在来ではなく移入のものであった場合の経路として、本種が確認されたうらら池に養鯉業者がコイを放流していることから、その放流時に混入した可能性もある。また、メダカの卵は鳥の体に付着して移動することがあるとされている (中村 1999)。植物公園には数多くの水鳥が飛来することから (大

丸 2004)、水鳥の足に本種の卵が付着して運ばれてきたとも考えられる。

おわりに

本稿では、ミナミメダカが植物公園に生息することを記録した。本種のように国内の多くの地域において絶滅が危惧されている種が植物公園内で観察できることは非常に重要であり、それらを活かした取り組みや整備を行うと良いのではないかとと思われる。また、植物公園内における生物相の記録はいまだ少ないため、今後も情報を蓄積していく必要性が感じられた。

引用文献

- Asai, T., Senou, H., and Hosoya, K. 2011. *Oryzias sakaizumii*, a new ricefish from northern Japan (Teleostei: Adrianichthyidae). *Ichthyological Exploration of Freshwaters* 22(4): 289-299
- 環境省 2015. レッドリスト. <http://www.env.go.jp/press/101457.html>. 2020年12月17日閲覧.
- 大丸秀士 2004. 広島市植物公園の野鳥. 広島市植物公園栽培記録 25: 41-48.
- 竹花佑介・北川忠生 2010. メダカ：人為的な放流による遺伝的攪乱. *魚類学雑誌* 57(1): 76-79.
- 中村滝男 1999. 空飛ぶメダカ 絶滅危惧種のふしぎ. ポプラ社. 東京.
- レッドデータブックひろしま改訂検討委員会 (編) 2012. 広島県絶滅のおそれのある野生生物 (「レッドデータブックひろしま 2011」). 広島県.

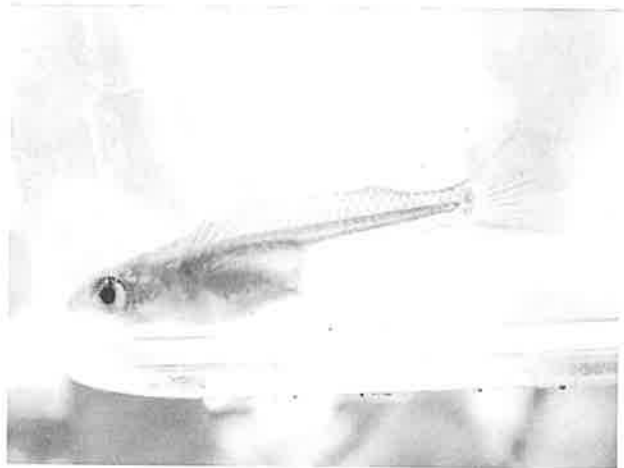


図1 植物公園で確認したミナミメダカ